度こそは男らしく此臭穢の一身を以て、如來と父母の爲めにさしあげたいことである。

思ふに理窟では、親孝行は出來ぬ、口尖きのみでは、如來の御爲めとなることは斷じて出來ぬ、何事も實行如何んを須つものである。一死以て父母を救はんとしたる純孝王子の跡をたづねてこそ、始めて私共の初志を達すべきである。而して是實に世尊因位の積功累德の一行であると承る時は、私共は戒懼して斯道の爲めに盡さねばならぬことである。

二九　世相の半面

昔、可愛い女房に先立たれ、獨りさびしく世を送つておつた婆羅門があつた。爾るに世話する人があつて、年若い女を後妻に貰らふてやつた、所が此の後妻は亭主の年の寄つておるのを厭やがつて、どもすると婦人の道を破らんとする嫌ひがあつてならぬ。それが爲めに老婆羅門は、一方ならず氣を揉んでおつた。

或時、女房は老亭主に向ひ、同族の若い婆羅門達を迎へて、法會を開きたいと云ふことを願ふたるに、老婆羅門は、若いもの等を迎へては、萬一の失敗があるかも知れぬと心配し、女房の願ひを許してやらなかつた。

女房は、どうしても自分の望を達せんと思ひ、其後種々と惡計をたくんだ。或時も前妻の子が、火中に墜ちたことがあつたに、女房は一寸とも是れを助け出そうともせぬ。すると老婆羅門は、何故そんな不實な所作をするかと詰つたるに、女房は平氣でだつて、私は貴方より外の男には手を觸れぬと云ふ誓ひを立てゝおりますゆへ、よしやあの子が可愛いにしても、男の子ゆへ、手がさへられませぬと答へた。

老婆羅門は女房の辯解を聞いて、頓んと感心して了ふた。それからは、何事も女房の云ふが儘にしておつた。かくて女房は老婆羅門の氣嫌の好き折を見て、再び大會を開きたいと申し述べたるに、此の度は、老婆羅門が快よく許してくれた。

然るに不貞腐つた女は、大會の席を利用して、年若い婆羅門と不義の樂みを通じたので、老婆羅門は、女の心の頼みなきことをかなしみて、一夜家財の中の目立ちたる物を荷造りして、女房を振り捨て、獨り他邦へ旅立つた。家を離れて間もなく、一婆羅門と道伴れとなり、四方山の話をしながら道中したが、其日の暮れ方には共に一處に宿泊し、明けの日も共々に道中した。然るにその日、一里程歩いたと思ふ頃、伴れの婆羅門が、急に言出すには、自分は取り返へしのつかぬ失敗をしたことがある、前夜の宿で、草の葉を一枚自分の衣裳につけて來た。自分は子供の

時から、今日の年まで人の物を取つたことは嘗てないのである、それに此の草の葉の爲めに、偷盗の罪を犯すことは、どうしても忍びられぬ、是れから一走りして宿主に返へし來るゆへ、どうか暫らく此處で待つておつて呉れと依頼した。

老婆羅門は是れを聞きて、世にもめづらしき正直なる人もあるものかなと、深く感じ入り、云ふがまゝに待つことゝした。狡猾なる婆羅門は、老婆羅門と別れて前夜の宿を指して途を急いだが、やがて老婆羅門の姿が見へぬようになると、自分は路傍の木影へ這入つて、コッソリと一休みし、良き時間を見計ふて歸り來り、おかげで草を返して來たと話した。老婆羅門は益々感心して心底より愛重した。

それより共々に道を急いでおると、老婆羅門は便通を催したので、自分の荷物を伴れの婆羅門に托して用足しておると、猫の皮をかむつて

おつた婆羅門は、今こそ千載の一遇と、其財寶を攫へて雲を霞と遁去つて了ふた。用足を終つて歸へりて來た老婆羅門は、道伴れの婆羅門の所作を眺めて、さて〳〵人の心は當てにならぬものかなと、深く感傷し、憂愁煩惱したが、今更ら何んとも致し方もなければ、獨りトボ〳〵と行手を歩んだ。

かくて一樹の下で憩むと、樹上の一鶴雀が、口中に草を銜みて、諸鳥に物語るようは、お互に力となりあふて、共に樂しく遊ぼうではないかと。諸鳥は其申出に同意して、孰れも我が巣を跡にして共々に飛び去つた。所が間もなく、さきの鶴雀はそつと歸へつて來て、諸鳥の巣を覗ひ、その中の卵を啄んで汁を汲ふて了ふた。やがて衆鳥が歸へり來つて、大騒ぎをすると、鶴雀は知らぬ顔をして前の如く草を銜んでおつた。衆鳥は口々に彼れの所業なるべしと瞋り責めたるも、彼れは知らぬ知らぬ

の一天張りで白狀しなかつた。衆鳥は、何んと云ふても手前の仕事に相違ないと惡口し、遂に鶴雀を打ち捨てゝ他方へ飛去つて了ふた。

前程より衆鳥の喧嘩を眺めておつた老婆羅門は、益々人世の淺間敷さを感じ長大息した。

鶴雀の行爲に浮世の淺間敷さを感じたる老婆羅門は、今は前進の勇氣もうせはて、茫然として樹下に默座しておると、後方より殊勝な法服を附けた一道人が、徐々と歩んで來た。道人は口の中にて「去々衆生」と唱へておる。

老婆羅門は、不思議な誦文もあるものかなと思ひ、近寄つてその譯を尋ねたるに、道人は答へて、されば、自分は出家の身にて、一切衆生を憐愍する者なれば、かふして道中する中にも誤つて蟲蟻を傷ふてはならぬと思ひ、かく誦文を唱へて、彼等に注意を與へておることであると

申した。

老婆羅門は是れを聞きて、さて〳〵殊勝な方もあるものかなと感じ入り、早速請ふてその道伴れとしてもろうた。

其夜道人の宅にて一宿することゝなつた。すると主人の道人の申すようは、自分は夜中に修行を致すことなれば、貴方は自分にお搆ひなく、別室にて安氣に休まれたしとて、懸け隔つた一室へ案内して呉れた。

老婆羅門は、益々道人の謹直なることに感じ、深く慶悦し臥床へ這入つた。然るに真夜中頃になると、家の中にて歌舞音樂の聲がしだしたので、不思議なことゝ思ひ、そつと臥床を出でゝ聲を便りに他室を窺ふてみると、驚くべし、晝間に感心したる道人は、今は酒氣紛々たる醉ひどれとなつて、美人を集めて、大亂痴氣を極めておつた。

茲に老婆羅門は、人世の真相を觀破し、天下萬物人と獸とを問はず一

も信ずべきものなしと覺り、思はず一偈を誦出し、

不捉他男子　以草還主人　鶴雀詐銜草
外道畏傷蟲　如是諸諂僞　都無可信者

と申した。

爾時、國内に一長者があつて、家には巨萬の財寶を蓄へておつたが、一夜、多くの珍寶を盜み去られた。長者は、早速に其由を王に訴出でたるに、王は、平常汝の宅へは、どんな者が出入りをするかと尋ねられたので、長者は、出入の者とては別にござりませぬ、たゞ日頃歸依する一婆羅門が長く出入を致さるも、此方は至つて清身潔巳の方にて、少しも世物を犯さるゝことなく、衣に着いた草の葉すらも、其主人に還へさると云ふ性質の方なりと申上げた。

王は、其奴が怪しいとて、直ちに召捕つて詰問せられたので、長者は再

び王の許に出でゝ哀願し、此の方に限つて斷じてかゝる所作はなかるべし、何故にかゝる淨行の方を詰責遊ばさるにや、自分は假令ひ財物を失ふも、此の方を責むるには忍び申さねば、願くば放捨れたしと申し出た。

王は長者に向ひ、そう〳〵心配するには及ばぬ、昔より外面清淨にして內心に奸惡を懷いておる者は澤山あることぢやで、屹度白狀さしてみせると申され、益々責め尋ねられたるに、果して其婆羅門が盜んでおつたのであつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

少婦の姦惡、婆羅門の狡猾、道人の放逸、さては鶴雀の醜惡、觀じ來れば、世相の半面は、確かに此の如きの僞醜惡を呈しておるのである。世は文明と誇り、人は人文の發展を祝するも、而も三千年前の社會の半面と、

三千年後の今日の世相と、些少も變化しておらぬではないか。昔の暗黑面を痛罵せられたる此の一小話は、適ま以て今日の暗黑面の照魔鏡となるではないか。

我等の勤むべき業は、此の暗黑を除去するに在ることは申迄でもないことである。新聞紙上に是等の跡を斷つまでは、我等は斷じて安逸を貪ることは出來ぬ。どこまでも粉骨碎身して、道の爲めに盡さねばならぬことである。

三〇　惡緣の纏縛

昔、世尊在世の砌り、提婆達多が世尊に對し、暴行罵詈を極めたことは、數へられぬ程であつた。爾るに世尊は、いつも寬容の大度を以て是れに向はれ、少しも反抗さるゝことがなかつた。隨從の諸比丘は、餘りに

執拗に提婆が世尊を苦しむるが故、何故にかくも深く敵害の心を懷くかと不審に思ひ、一日世尊に向ふて其理由を尋ね奉つた。

すると世尊は、彼れが我れを罵詈惡口することは、今に始まつたことではない、過去世の昔より常に我れに敵意を挾みたるも、我れは恒に忍受して少しも彼れに向はぬのであると仰せられた。

諸比丘は世尊の說明を承り、過去世に於て如何なる事のありしかと御尋ね申したるに、世尊はされば、なりとて、次ぎの出來事を物語られた。

昔、梵摩達多王が波羅捺國を統御せられし時、王の政のよろしきを得たるが爲め、人民熾盛にして豐樂極りなかつた。王は、善意と修善意と云ふ二人の夫人があつたが、其中、大夫人なる善意は姿も心も芽出度き性であつたゝめ、深く王の恩寵を蒙むつておられた。爾かし惜しいことには、王子がなかつた。反之て第二夫人の修善意には、一人の王子が

あつて、而も聰明仁慈の性質にて、父母に對しても誠に孝順であつた爲め、王は深く愛念せられ、早くより學堂に送つて是れを敎育せられた。

一日、王は大夫人と共に郊外に遊樂し盛宴を張られたことがあつた。其時、王は別に酒食を作つて宮中の第二夫人の許に送られしに、第二夫人は送り物がよろしからぬとて大變に立腹し、惡口罵詈を極め、こんなつまらぬ酒は、とても飲むことは出來ぬ、自分は勝手に我が子の咽を刺して、生血を飲むよと言放つて、手にも執らなかつた。

使の者は、第二夫人の雜言を聞き、にがゝしき言振りかなと、心惡くゝ思ひ、王の許へ歸つて一部始終を物語つた。

王は是れを聞き、非常に怒られ、よしそんなことを云ふておるなら、此の方でも捨てゝはおけぬ、後日の誡めになることなれば、一つ王子を道つて殺せるかどうか、たしかめてやるがよいとて、早速人をつけて王子

を第二夫人の許へ送り屆けしめられた。

第二夫人は、王の傳言を聞き、益々瞋恚の焔を熾し、卽坐に王子を膝下に引寄せ、一刀の下に刺し殺さんと致されたれば、王子は合掌して、我れに罪なき由を述べて、生母の所作を咎めらるゝと、夫人は、王の勅命なれば、我れに咎なしとて聞入れられぬ。それで王子も致し方なく、母に對して心底より哀願して許されんことを願はれたれども、どうしても聞き入れられずして、遂に刺し殺して了はれた。

此の一場の悲慘の出來事を物語られし世尊は、辭を改めて仰せらるゝようは、爾時、小王子は我が前身にして、生母は提婆達多の前身なり。我れは昔し未だ凡夫の身なりし時にすら、我が生母に逆らはず、母の爲すが儘に任かして、些の恨心を懷かなかつたことである、然るに況んや、我れ今三界を超出したるに、如何んぞ提婆達多の所作に對して忍ばずにおらるべきか、我れは寧ろ彼の行爲を思ふ毎に深く大慈心を記すと。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

業報の纏綿は世尊も尙且つ脫し給はぬものである。我等が日常外圍の事情より、種々不足勝の迷惑を受ることは、當前の事である。我等は是れに對して決して恨むべきでない、寧ろ靜かに世尊の後塵を拜して、忍辱の德を修めねばならぬ。

佛を知らず、德を聞かざるの昔ならば、心の儘に恨みの百萬も述べ、怨憎の及をも振ふてもよいが、今は幸にして如來の慈光の中に攝取せられたるものなれば、斷じて昔の癖を出してはならぬことである、たゞ心靜かに大慈の眼を以て向ふことが肝要である。

五逆の徒ら者をも捨て給はずして、永劫の辛苦を嘗め給ひし如來樣のことを思はゞ、我等の耐へられぬことをは一事も世の中にあるま

いと思はる。如來を忘るゝが故に怨恨あり、憎嫉あり、慈光界裡にはかゝる惡魔は斷じて跳梁するはづはない、大哉如來の德。希くば此の樂天地間に一切の煩惱の迫害を免がれて、心廣く逍遙したいことである。

三一　七天人の述懷

世尊在世の昔、一夜七人の天人が天降りて、世尊の許を訪づねて自己の述懷談をしたことがある。

初來の天人は容貌端正にして光明は一里四方を照し、十天女の眷屬を從へておつた。彼れは世尊に向ふて至心に頂禮し奉りてやがて一面に却きて世尊の敎誨を聽かんとした。世尊は彼れに對して、汝は修福の德によつて天身を受け、五欲自ら娛みおることなれば、定めし快樂安穩ならんと尋ねられたるに、天人は對へて、私は幸にして天上界へ生

れましたものゝ、而も心は常に憂苦致しておることであります、かく申さば何をさう憂苦するやと仰せらるゝことならんが、これには仔細あることにて、其昔私が修行せし時、父母師長沙門婆羅門に對して、忠孝恭敬の誠を運びたりしも、而も私は慇懃に恭敬禮拜迎來迎送することを致しませんでした爲め、宿福圓滿ならず、他の諸天の如き果報を得ることが出來ずして、日夜憂苦しておることであると申した。

次ぎに、一天人の容貌身光及び其眷屬前の天人に十倍する者が出現し、世尊に近づき頭面頂禮した。世尊は彼れに對して、汝は天上に生れて定めて安樂を得ることならんと仰せられしに、天人は、なか〳〵左樣の境界に至り申さず、衷心誠に憂苦することのみなりと申し、その故を談するようは、私は前世に修行を致せし時、父母師長沙門婆羅門に對し

て、能く忠孝にして恭敬禮拜を致したるも、而も牀座温暖の敷具を供養することを忘れし爲め、今の身となりしも果報餘天に及ばず從つて昔の修行の足らざりしことを後悔し、日夜憂苦に惱みつゝあることなりと申した。

第三次に現はれたる天人は、形貌光明及び眷屬共に前の者に十倍しておつた。彼れも亦佛所に至つて頭面禮足したれば、世尊は彼れに向ふて、汝天身を受け快よく安樂を得ることならんと尋ねらるゝと、天人は、私は幸ひにして天宮に生れたるも、心常に憂惱を懷き、日夕安んずる所なしと申し、その故を述ぶるゝは、私在世の砌り、父母師長及び沙門婆羅門に對して、忠孝恭敬さては禮拜の誠を盡し、それ等の上長の人々の爲め牀敷を施したるも、而も廣く飯食を設けて供養することをなさゞりし爲め、今此果報を受くるに當つて、到底餘天の如き勝果を得

ること能はず、他の榮華を眺むる毎に、我れの宿福の厚つからざりしことを嘆ずるのみなりと申した。

第四次に現はれたる天人は、容貌光明及び其眷屬共に前の天人に十倍しておる。彼れも亦佛所に至つて頭面禮足した。世尊は復前の如く、汝天身を受け快よく安樂を享有せることならんと申さるゝと、彼れは答へて、我れは天に生じて今日の果報を享くると雖ども、而も心には常に憂惱ありとかこちて、その所以を説いて申すには、我過去世に於て、君父母師長沙門婆羅門に對し、忠孝恭敬禮拜することは圓滿をきはめ、その上敷具飯食にも事欠くなく布施し奉りしも、たゞ一つ、教法を聽くと云ふことを怠りし爲め、上天の後に果報餘天に及ばず、從つて昔何故に法を聽かざりしかと、なか〳〵に我れの昔の愚かなることを恨みて、衷心安んずるところなしと申した。

次に現はれたる天人は、身色光明及び其眷屬、共に前の天人に十倍しておつた。彼れも亦佛所に至つて頭面禮足し奉つた。佛復尋ねて、汝天身を受け快樂無極ならんと申されたるに、彼は答へて、決して然らず、我れも亦斷へぬ憂惱の身心を責むるものありとなげきて、その理由を説明して申すようは、我れ前世に於て、君父母師長沙門婆羅門に向ひ、能く忠孝恭敬禮拜の勤を爲し、飲具飲食に至る迄でも、注意のあらんかぎりを盡し、其上又謹んで教法を聽きたるも、愚かなる我れはその深義を解せずして、たゞ徒らに是れを聞流したる爲め、今日天上の勝果を受くると雖ども、而もその德餘天に及ばず、それが爲めに心を苦しむること多大なりと申した。

第六次に現はれたる天人は、身色光明及び其眷屬等悉くさきの天人に十倍しておつた。彼れは佛所に來つて頭面禮足したりければ、世尊

は復前の如く、汝天上界へ生れて定めて快樂なることならんと尋ねられしに、彼れの答は前と同樣で、なかゝに憂惱多くして身心の安まる時なしと談じ、その理を説いて曰く、我れ前世に在つて修行を致せし時、君父母師長沙門婆羅門に對し、自ら能く忠孝恭敬禮拜し、飲具飲食に於ても亦能く誠意を盡し、且つは勉めて法を聞き義を解したるも、而も怠慢なる我れは、是れを修することを致さゞりし爲め、その德を獲ることを能はず、幸にして上天の勝果を得たるも、而も德に於て一分の缺くる所ありし爲め、餘天の光榮に及ばず、他の光榮を見聞するにつれて、常に深く自ら修因の不滿なりしことを悔責すと申した。

最後に現はれたる天人は、容貌光明及び其眷屬等孰れも前の天人に十倍し、儀容最第一であつた。彼れは恭しく世尊を頭面禮拜し奉り、却いて一面に座し、謹んで世尊の慈訓を聽かんとした。

世尊は前の如く彼れに對して、汝天身を受け定めて快樂無極なることならんと尋ねられた。彼れは世尊の尋ねに答ふるようは、我れ幸ひにして今日天宮に生れ、五欲自ら娛み、求むる所の物は念に應じて乍ち現出し、眞實快樂にして少しの憂惱なし、何故にかゝる幸福なる身となりしかと考ふるに、我れ嘗て前世に於て修行せし時、君父母師長沙門婆羅門に對し、能く忠孝にして恭敬禮拜し、敷具飲食亦能く誠意を盡し、加之ず法を聽きてはその義を解し、解したる程のことは一々是れを我身に實行して、敢て是れに違ふことを致さいりし爲めなり。我れは此の因緣に依つて、上天の妙果を受け、身形端正にして、光明殊妙、眷屬亦衆多にして、到底餘天の比に非らず、我が修行の此の如きが爲め、果を得ると滿足なり、滿足なるが故從つて勝果なり。かゝれば一切諸天の內にて能く我れに及ぶものなし。及ぶものなきがゆへに我が心常に快樂

なりと申上げた。

* * * * * *

七天人が世尊の膝下に跪いて述べたる追懷談は、等閑に開流してはならぬことである。治身修行の要道は、明かに這般の中に述べ盡されてある。

初來の天人より第四次の天人迄は、恭敬孝養の上に於て、一々缺くる所あることを敎へている。私共は父母及師長に對し、日夕奉仕する上に於て、是等諸天の爲せし過を再び繰返さぬようにせなければならぬことである。

第五次より最後の天人迄は、聞法の上に於て反省熟慮しなければならぬ諸點を仔細に敎へて呉れたではないか。法を聞くとも義を解せざれば詮なく、義を解するとも身に行はざれば要ないとは、實に味ひ

る教訓である。眞俗二諦何事も此の實行の如何に依て鼎の輕重を問はるゝものである。世には口能く玄理を談じ、筆能く妙味を傳へる者は多くあるが、然れども自己が正しく是を體得して、日常の行爲悉く純を其教に執ると云ふ者に至つては實に少ない。此の一點は自他互に再三思考せねばならぬ事である。

大道はそんなにむつかしいものではない。眞理は決して入込んだるものではない。何にもそう大學者の談義を聞かなくとも容易に諒解が出來るものである。人の苦しみを視て歎ぶものはない、人の悲しみを視て祝するものはない。唯夫れ一點の煩惱心あつて衷心に萌すあらんか、茲に乍ち人を苦しましめ、人を悲ましめて、以て自ら快とするが如き邪念を生ずるに至るのである。我等若し勇猛精進して此の煩惱心を排斥するあらんか、天下の善行美事、一つとして我に實行の出來

ないものはない。如來は明かに是を斷滅せられたるが故に、三界に遊歩して思ひの儘に大慈悲の行動を致されるのである。

善事は金錢がなくても出來る、老親の臥し給へる臥具のすそを能く推へて寒さを感じ給はぬようにするも、明かに是れ臥具の供養である。少しの心掛にて暖かなるものを差上げるも、飲食の供養ではないか。事に大小はあつても苟も一念の孝養の實は十全に盡くされるものである。

教法も亦それと同じく、一概に哲理を尋ねるにも及ばぬ、無法に經文を漁るにも及ばぬ。昔は悉なる此丘は一仰の法門を解して阿羅漢果を證つたと云ふことがある。我等若し猛然として大慈悲の心に立歸り、敢然として社會の表に立つあらんか、隨緣隨處に福德の良田は展開し來るべし。

・觀無量壽經に曰く「欲生彼國者、當修三福、一者孝養父母、奉事師長、慈心不殺、修十善業。二者受持三歸、具足衆戒、不犯威儀。三者發菩提心、深信因果、讀誦大乘、勸進行者」と。大道は誠に容易なるものである。

三二　瞋恚の怪火

昔、ひとりの至極正直の下女があつて、いつも主人の爲めに麩麥豆をつくる役目を勤めておつた。所が主人の家に、一匹の羝羊が畜ふてあつたが、一日此羊羝が下女のすきを窺ひ、したゝかに麩麥豆を偷み喰ふた。

主人は、そんな事とは知らず、いつもより豆の量が少い爲め、下女がどうかしたのであらふかと思ひ、大變立腹して下女をしかりつけた。下女は自分には些少も覺えのないことなれば、なか〳〵承知せず、一言二言辯解をしたものゝ、どうせ主人には勝つことが出來ねば、其場はあやまつて許してもらふことゝなつた。

爾來正直一轍の下女は、氣がムシャクシャしてならる。此畜生さへおらなんだら、こんなぬれぎぬはきせられはせぬがと。見當り次第に杖で以て羝羊を打きつけた。羝羊も始めの程はコソ〳〵と逃廻つておつたが、餘りに毎度打ちさいなまれる爲め、遂に下女を恨み出し、すきさへあらば、衝きかゝらんとしかけた。

或時、下女が火を運んでおつた所が、羝羊は杖を持つておらぬを氣付き、おのれ平日の恨みの程を知れと云はぬばかりに衝きかゝつたので、下女はあはてゝ手にしておつた火入れを取り落した。爾るにおりわるく、其火が羝羊の背毛にもゑついたので、羝羊は熱さの爲めに村中を

狂ひ廻り、到る處へ衝きあたり、其爲め一村中を焼き拂ひ、村中の者を一人も殘さず焼き殺して了ふた。

災難はそればかりでなく、その火がとうどう山の立木にもへついて、山火事となつた、山中に棲んでおつた五百の獼猴は逃げ場を失ふて悉く焼き殺されて了ふた。諸天は此の有様をながめて、悲慘な事を仕出したことと慨嘆し、次ぎの偈を說いたとのことである。

瞋恚鬪諍間、不應於中止、抵羊共婢鬪、村人獼猴死。

* * * * * *

瞋恚の怪火が現實に現はるゝと、此の如き大悲慘な出來事を生ぜしむるものであつて誠に恐るべきの至りである。よしやそれが實現せられなくとも、私共の精神内の善根の資料を焼き盡すことは、計り難き程である。昔は大乘法師は、一念の瞋恚の爲めに、四十年間の法華讀誦

の功を灰燼に附して了ふたと云ふことである。どこまでも恐るべき怪焰を放つものである。

瞋恚の煩惱は、己れより上長の者に對する時は、常に怨恨の相となつて現はれ、目下の者に向ふ時は、憤怒の行爲となつて出現す、跳れにしても其波及する處はなか〳〵に廣いものである。主人が妻君を叱ると、妻君は乍ち下女に當る、すると下女は罪もない子供に當ると云ふ有様となるのである。而して是が現在のみに止まるかと思ふと、なか〳〵にさうでなくして來世に迄でも纏綿するものである。釋尊は此有様を大經の中に「世間之事、更相患害、雖不即時、應急相破、然含毒畜怒、結憤精神、自然覓識、不得相離、皆當對生」とお說きなされておる。

されば私共は不幸にして此煩惱に襲はれたる時は、能く心を靜めて、他に當ることはなきかと云ふことを靜慮し、現在及未來に亘つての業

報の種を蒔かぬようにしなければならぬことである。

三三　一句の教誨

月氏國の栴檀罽尼吒と云ふ大王は、深く佛教に歸依しておられた方であつた。此王或時臣下の者より、罽賓國の大阿羅漢、祇夜多尊者の名を傳聞せられ、どうかして一度面晤して、其慈訓を聞きたひものであると思ひつめられ、遂に諸臣を從へて、遙々と尊者の許を訪問せられた。

王は、途すがら倩ら思はるゝようは、我れ今天下に王となり、萬民悉く敬伏をせざる者なし、然るに今我れの如き身柄ある者が、わざ〳〵鄙を枉げて赴くと云ふのであるで、相手の方にも餘程の大德がなければ、到底我が供養を受くることが出來まいと。

月氏國の大王が祇夜多尊者を訪問せらるゝと云ふことであるで、其

評判は乍ち罽賓國中にひろまつた。それである人が、早速に尊者の許へ驅けつけ、大德尊者、此度は月氏國の大王が態々お越しになると云ふことなれば、貴僧におかせられても衣服を改めて、お手落のないよう、御接待あそばさねばなりますまいと注意した。

所が尊者の云はるゝには、自分は佛の教へで聞いておることであるが、出家の身は、修むるところの道が、世俗の者よりはずつと尊いことであつて、到底くらべものにはならぬ、從つて斯道に入つた者は、たゞその道の德を修めさへすればよいとのことである。それぢやで、別に衣服を改めて、お迎ひすると云ふが如き、世俗に媚ぶる振舞をするには及ばぬとて、注意の辭を取り上げず、王の到着の日の如きも、平常のまゝで、端然と靜坐し、王が門前に來られても、立つて是れを迎へようともせられなかつた。

やがて王は安着せられ、直ちに進んで尊者に謁せらるると聞きしに勝る大威德の方であつたので、大變に敬信せられ稽首禮拜して一面に却き、謹んで其教を聞かんとせられた。

時に、尊者は、唾を吐かんとしたので、王は我れ知らず唾器をさゝげて、尊者の前へ參られた。

すると尊者は、徐ろに口を開きて、貧道は未だ薄德にして、到底大王の爲めに福田となることは出來申さぬ。然るに大王は、何故に貧道の如き者の所へ來駕せられしかと申した。

王は、この辭を聞かれ、心中非常に慚愧し、私かに思はるには、自分が途すがら、高慢心を起して來たのをば、尊者は疾くに觀破してしまわれたな、神德不思議の方でなくては、とても他人の心中を、かく迄でも明らさまに觀拔かるゝことは出來はせぬと、益々畏敬の念を生じ、一倍に恭敬

の思ひを增された。かくてやゝ暫くすると、尊者は僅かに王の爲めに、一言の教誨を垂れて、

來時道好、去如來時。

と、申した。王は此の一言に深く滿足せられ、稽首禮拜して尊者の許を退き、やがて駕を促がして歸國の途につかれた。道の半ばにして、群臣は王に向ひ、臣等は遠く大王の行幸に從ひ奉りて彼の國に赴き、何にか變りたる尊き教へを聞くことであらふと思ひたるに、かゝる一言を聞かされたるのみにて歸へると云ふことは、何んとも詮なきわざにあらずやと怨言を申した。

王は答へて申さるには、卿等は得る所なしと、怨言を述べて、我れを責むることであるが、我れはかへつて卿等の心を解するに苦しむことである。卿等は尊者の我れに教へたる、

來時道好、去如來時

の辭を、如何に解したることであるか。かゝる難有き教誨は、復と聞くことを得ざるべし、思ふに卿等は此の句の意味を解せざるものならん、我は今是れを卿等の爲めに解說すべし。

來たる時の道は好しとは、昔、我れ持戒布施し、僧坊を修め、塔寺を造り、種々の功德を殖へたるが爲めに、今は王種に生れて萬福を享る身となつたことである。是れ卽ち我が過去世より、現在世に來る時の道の好かりしが爲めなり。されば我れは現在世に於ても、勉めて功德善根を修し、こゝを去つて未來世に移る時に當つても又過去世より現在世に來る時の如くせよとの辭である。思ふに此の一言は、明かに我が終身遵奉すべき道を敎へて、餘りあるに非ずや。既に是れを聞く、他の千萬言の如きは、我れに執つては要なきなりと。

群臣は王の說明を聞きて、始めて尊者の敎誨を了解し、稽首拜謝して申すようは、臣等愚下にして、智慧愚賤徒らにかゝる難有き妙句を妄解し來れる時の道を踐んで本國に歸れとの辭と解したることである。誠に大王の解說の如く、尊者の一言は實に言旨妙契なり。大王の今日あるは、全く積德の然らしむるの致すところなるべしとて、孰れも歡喜して王の許を退いた。

* * * * * *

滿つる器には、水を盛ることは出來ぬ。道に志ざして、導師の許を訪ぬるときは、吳々も己を空しくして、其慈訓の妙味を汲み取らねばならぬことである。邪心と慢心の惡氣が滿ちておると、どんなに善き敎へにても、ちつとも心の中に這入るものではない。

王と臣下とは、共に等しく尊者の敎誨を聞いたのであるが、而も王は

その意を諒得し、臣下は何んの得る處なくして立ち去つた。是れ敢て王は賢にして、臣下は愚なるが爲めと斷ずること勿れ、一國の柱石とも仰がるゝ臣僚なる限りは、高才明智の者も多數におつたに相違ない。而も尚かゝる差異を生じたるは、全く己れを空しくして其教を聞きたると、否とに基ひするものである、戒めずんばあるべからず。

來時道如の教誨は、私共も亦襟を正して聞かねばならぬことである。私共は兎角に現在に拘束して、過去と未來を想到するの明がない。從つて此の現在に在つて些少の得意のことがあると、乍ち歡び樂みて前後不覺となり、是に反して、些少の失意の境に陷ると、乍ち泣いて悲しむのであるが、考へてみると、こんな下らぬ馬鹿氣たことはない。一念の現在は、前に無數の過去あり、徒に無數の未來あつて、互に連續す。突爾として湧起もせねば、消散も致しはせぬ。されば別に泣にも笑ふにも

及ばぬではないか。思ふに今日今時の行ひは、やがて明日明時の因となるものなれば、私共は念々の行爲に對し、寸分の餘念もなく、寸善尺德も是を積累することを勉めねばならぬことである。

三四　捨身の博愛

昔、帝釋天が命終の期の近いたのを知つて獨憂愁しておると、毗首羯摩天が出て來て、何にをそう憂愁せらるゝかと尋ねた。帝釋天は、自分の死期も既に近づいたが、今は佛法も滅し、且つ諸大菩薩も無き爲め、誰に向ふて身後の處置を問ふべきよしもなく、是れが爲めに我心歸依する處なく、日々快々として樂まぬのであると申した。すると毗首羯摩天は、それならば別に御心配なさるにも及ばぬ、頃日閻浮提に尸毗王なる者があつて、菩薩道を行じておるとのことなれば、よろしく彼の王に

歸依せらるべし、さすれば必ず覆護せらるゝこと必定ならんと申した。

是れを聞いて帝釋天はいたく歡んだが、然し尸毗王が果して大菩薩であるかと云ふことを疑ふた。それで毗首羯磨天に申すようは、それはよいことを聞いたが、爾かし彼れが果して大菩薩であるか否やと云ふに就ては、多少の疑もあることなれば、是れから貴方は鳩と化し、自分は鷹となつて貴方を追窮して彼の王の許に參り、以て其志の至誠の如何を試めすことゝしよではないかと。所が毗首羯磨天は、菩薩大人を苦しむると云ふことは、甚だよろしからずと諫言したので、帝釋天は次ぎの偈を說いた。

我亦非惡心　如眞金應試　以此試菩薩　知爲至誠不

かくて毗首羯磨天は身を憐れなる鳩に化し、帝釋天の鷹に逐はれて尸毗王の殿中に逃げ込み、王の腋下に隱れて愛憐を乞ふた。好餌を逸

したる鷹は殿前に立つて、大王、只今此殿中に逃げ入つたる小鳩は、我が餌食となるものなれば、速かに我れに賜はるべし、我が飢急にして、分時も堪ゆる能はずと申した。

王は答へて、我れに大誓願あつて一切を度せんと思ふことなれば、決して汝に與ふべからずと申された。

鷹は王の辭を答めて、大王は一切を度せんと申さるが、今若しかの小鳩をかくまふて我れに與へられざる時は、我れは斷食の爲めに命を殞すべし、かくても王は快よしと存せらるか、我が一類の如きは、王の所謂一切の内に含有せられざるかと申した。

王は尤もなることゝ思はれ、それでは汝に餘肉を與へさへすればよいではないかと申さると。鷹は答へて、新鮮の肉を頂きさへすれば、別に小鳩を要求致さぬと申した。

尸毗王は、鷹の要求を聞いて思はるゝようは、彼れの希望を滿足せんとすれば勢ひ他を殺害せざるべからず、かくては彼れを救はんとして、反つて他を害することゝならん、生あるものは其身を愛惜することは、孰れも同しきことなれば、此の場合は我自ら其局に當るより外に別に良法なかるべしとて、直ちに利刀を執つて自ら股の肉を割ぎて彼れに與へられた。

然るに鷹は滿足せず、重ねて申すようは、博愛なる大王は定めし一切を平等視せられ、我身の如き小鳥に對しても、決して偏頗の處置はあそばさざることならんと存ず、就ては只今賜はる處の鮮肉も、願くば彼の小鳩と同一の均量にせられたしと。

王は直ちに左右を顧みて秤を持ち來りて、我が鮮肉と小鳩の重さを量らしめらるゝに、明かに鳩の重さに達せぬ、それで再び股の肉を割きて

増加せられたが、それでも同量とならぬ、かくて割いては加へ、割いては加へられたるも、容易に同量に達しない。やがて兩股の肉は盡きはて、只殘骨のみとなつたが、未だ小鳩の重さに及ばぬ。

かくてはとて、改めて兩臂の肉を割き、兩脇の肉を附加せられたるが、尚ほ不足を感じたるにより、茲に尸毗王は一大決心し、全身をあげて秤の盤に上さんとせられるに、今は氣力も盡きて起ち上り給ふことが出來ず、思はず打斃れ、一時は氣を失はれた。やゝしばらくして蘇生せられ倩ら思はるゝようは、我れは久遠劫來此の肉身の爲めに苦められて三界を輪廻し、酸毒のありだけを嘗めたことである、爾るに今は幸にして大誓願を起し、長へに極苦を免がれんと致しかけたことである。されば此際決して懈怠すべきの時にあらずと、種々己れを責めて、強ひて立つて盤上に身をおかれた。

此有様を眺めて、小鳩と鷹は、乍ち本身を現はして天子となり、王に對して、此の如きの所作を爲して毛髪の悔ひもなきかと尋ぬると。王は言下に一毫の悔恨もなしと斷言し、且つ己れは此の如くにして佛道を成せんと欲すと申述べられた。二天子は王の至誠の辭を聞いて、未曾有の大悲行なりと感嘆したとのことである。

＊　＊　＊

道の爲めに盡すこと尸毗王の如くにして、始めて全きを得たるものと申すべきである。而して是實に世尊が永劫の修行中における一條の物語りである。佛道の本領は如上の決心あつて、其要を得べきである。

寒いからといて小言を云ひ、熱いからといて理屈を云ひ、たゞ徒らに臭穢の一身の奴となつておつては、いつまで經つても道の本源には達せら

るゝものではない。私共はどこまでも大勇猛心を奮起して、萬難を排して突進すべきの覺悟を以て事に當らねばならぬことである。眞諦と云はず、俗諦と云はず、世事一切如是底の決心を以て立つあらんか、成功の榮冠は必ず私共に降來すべし。

三五　無法の祈願

昔、貧乏暮しの二人の兄弟があつて、やつとのことに其日の煙を立てゝおつた。

兄は、何んでも一ついつかどの長者になりたいものと、しきりに氣をいらち、毎日弟のみを野良仕事に出して、自分は毗摩天の祠にこもつて、どうか私を金持ちに致して下されと、一心不亂に祈願をこめておつた。

毗摩天は、此奴は隨分得手勝手な願をかける奴ぢや、自ら勤めずして

樂な身にならふとは、氣の好い話であるはい、一つ濟度してやらねばなるまいと思ひ、それで一日身を弟の姿に變して、兄の祈願しておる所へ現はれ出でた。

すると兄は乍ち咎め立てゝ、貴樣はなぜに仕事を止めて、こんな所へ遣つて來たかと叱りつけた。

弟は、自分も兄さんのやうに祈願して、金持ちにならうと思ふて來たのであると答へた。

兄は、お前は田地を耕へさず、種を下ろさずして、金持ちになれるかと詰つたので、弟は、左樣か、種蒔いて田地の世話をせねば長者になれぬのか、自分はそんな面倒なことをせいでも、兄さんのやうに祈禱さへしておれば、大福長者に成れると思ふたからであると申すと、兄はギュッと行き詰つて、二の句がつげなんだ。

そをすると毗摩天は、乍ち正体を顯はし、兄に申し聞すやうは、お前は今日から布施の大行を修めさへすれば、自分は必ず應分の力をお前にかして長者にしてやるべし。全体お前は、今日まで布施の因を修めぬから貧乏の苦勞をしておるのである。然るにその因を忘れて徒らに自分に向ふて祈つた所で、どうして果報が來るものか。丁度冬の眞盛りに、百千の天神に菴婆羅果を下されと祈願しても、幾ら神の威光であるからとて、極寒の最中に果物を結ばすことは出來はしないよ。お前の願は是れと同じである、自分が勤めずして福を下されと云ふた所が、冬の果物を望むが如きであつて、とても得ることは出來ない、それよりも時節が來つて熟しさへすれば、求めずとも果物は得らるゝのである。尙重ねて次ぎの偈を說いて聞かした。

福業如果熟、不以祠祀得
人乘持戒車、後得至天上

無法の祈願

定智如燈滅　得至於無爲　一切由行得　求天何所爲

＊　＊　＊　＊　＊

人は兎角に斯樣な無法の祈願を致すものである。自分が勤むると云ふことは棚に上げて、何かなしに果報の善きことを望むものである。稼ぐにつゞく貧乏はない稼ぎさへすれば、何んとかなるものである。稼ぎは世渡車の油である、油をきらしておいて車の疾きことを望むのは無理なことである。

天は自ら助くる者を助くるのであつて、自ら助けざる横着者では、とても上天の愛護を蒙ることは出來ぬものである。而して是れたゞに天に限らぬ、社會も人類も皆此の原則に依つて、我等を幸福ならしむるものである、是れを離れては、決して我身に幸福を將來するものではない。

天を恨みず人を咎めず、天に求めず人に求めず、二本の足と二本の手と、而して一つの腦力を充分に使ひ、かくて仁慈博愛の心掛けで參りさへすれば、萬福嘉祥は必ず己れの身邊に蝟集するものである。

三六　身口の寵

醫禪延の城主惡生王は、若い時分は至つて邪見の性質であつて、あらゆる暴惡の非行をなし、それが爲め他人がどんな目に遇ふとも、少しも是れを顧みぬと云ふ風であつた。爾るに擧朝の臣僚は、孰れも王の威光に恐れて、誰一人として是れを諫むるものがなかつた。

其頃、世尊は諸弟子を諸國に遣はし、人々を敎化なされておられたが、王の非道の噂を聞かれ、どうかして正道に導きたいものと思召された。所が幸にも迦栴延は、彼の國の婆羅門種であると云ふ因縁があつたの

で、世尊は、彼れに王及び人民を教化せよと仰せ付けられた。迦栴延は世尊の仰を畏まり、早速古郷を指して旅立つた。

惡生王は、邪法を信じ居られるが爲め、毎朝天を拜するまでは、誰にも會見せぬと云ふことにして居られた。

迦栴延は、惡生王を教化する爲めに、ある朝未明に起き、身を立派なる外國の使臣に變つして城内へ入り込み、王が寢室より出御せらるゝと共に、乍ち本形を顯はし沙門の姿となつた。

王は剃髮の人をひどく嫌らふて居られたから、是れを見て非常に立腹せられ、即座に召捕つて一刀の下に斬り捨てんとせられた。

爾時、迦栴延は、靜かに王に向ふて云ふ樣は、何の罪ありて私を斬り給ふや、私は王に對して、不興を蒙るようなことを致した覺はないと申上ぐると。王は、汝は剃髮のものではないか、我れは汝等の如き者を見ると、不吉であるゆへ、是れを殺さんと思ふのであると申された。

迦栴延の云ふには、これは近頃奇妙なことを承るものかな、抑も不吉とは、どちらの云ふことでござろうか。大王、願くは熟考せらるべし、思ふに大王は我れを見給ひしとて、一毫の德も損じ給ふことなし。反之て私こそ、王を一見したる計りで殺されんければならぬことになつた。いて見ると不吉とは、却つて此方より申さねばならぬことであると申いた。

元來王は聰明な方であるから、此一言を聞いて如何にも尤なことゝ思ひ、遂に是れを放還せられた。そうして密かに二人の使者をして迦栴延の跡をつけて、住所及食物等の樣子を取調しめられた。

二人は迦栴延に從つて行いてみると、其住所とては、只一本の樹の下であつて、此に端座し修行をして居るのである。そうして食物と云へ

ば、人の惠みを受けて居るのであつた。たまゝ食を受けたる時は、二人の使者にも分配してくれたが、其餘りはみな河にすてゝ了ふた。

やがて二人の使者が歸へつて來ると、王は早速尊者の樣子を尋ねられたので、二人は具に事の次第を物語つた。

他日、王は尊者を招き麁食を供しおき、人をしてかゝる粗末なるものをお差し上げ申しては、定めしお口に叶ひ申さゞるべしと尋ねしむるとの。尊者は、充分滿腹致し申したと答へた。その後、王は上味の食を供し、又人をして此度は尊者のお口に叶ひ申しゝかと尋ねしむると。尊者は、充分滿腹致し申したと答へた。

すると王は尊者に向ひ、此方より差上げ申す食物は、麁細の撰びなく、いつも滿腹致したと申さるゝは、如何なる譯にやと尋ねらるゝと。尊者は、身口は糞の如し、栴檀も燒けば、糞穢も燒く。食も亦そと同じく、只

滿腹すれば事足るとて、尋て一句の偈を說いた。

中身猶如車、　好惡無所擇。　香油及臭脂、　等同於調利。

王は此の偈を聞きて、非常に感動せられ、其後、王は婆羅門を招待して食事を供養し、始めに麁食を與へらるゝと。婆羅門共は、顏色を變へて怒つた。次ぎに復美食を供せらるゝと、孰れも滿面喜色を顯はして是れを食した。

王は此樣子を見て、深く婆羅門の氣儘なるに歎き、彼の迦栴延がどんなものを食はしても、少しも不平を云はぬ點に於て非常に感せられ、遂に迦栴延の敎化に耳を傾けらるゝやうになられたとのことである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

世には三度の食事の度ごとに、何んとか小言を言はぬと氣が濟まぬと云ふ横着物があるが、是等の者に對しては、是非共に尊者の此敎誨を

聞かせたいものである。

衣と食と住とは、人生の三大要件ではあるが、而もそれが人生の最終の目的物ではない。私共は食ふ爲めに生きておるのではなくして、生きんが爲めに食ふのである。されば食物は此の生きると云ふ目的にかなふものであればよいのである。

一體、食物位の些少の事に、大切なる心思を勞せねばならぬと云ふのは、その人物に向上遠大の志想がないからして起り來るのである。人として一大抱負を有しておつたならば、そんな些事には、氣を遣ふておる暇はないものである。

昔南洲翁、弟從道氏が下女に對して、汁加減を誤つたることを叱したるを聞き、汝はそれしきのことを氣にかけておるか、そんなことでは、天下を料理することは出來はせぬぞと大喝したそうである。さすがに

一代の偉人だけあつて、氣のつけ所がちがうておる。

隨處爲主と云ふことは、世尊說法の一面である。私共は如何なる事に向ふても、常に其主となるの覺悟がなくてはならぬ。三度の食膳に向ふごとに、能くその主となるか、否やを考慮せねばならぬことである。主は能く人を使ふ、使はるゝ者は伴である。私共は食膳に對して、これでなければ箸が執れぬと云ふ時は、明かに食膳の爲めに召使はれておるのである。堂々たる丈夫漢が、無心の食物に驅使せらるゝと云ふことは、誠に恥づべきの至りである。

口は竈なりとの一言の敎誨は、食前方丈の慾に驅使せらるゝ惡生王をして、冷汗を流さしめたることであつたであろう。王は此一言の下に尊者の偉大なる人格を覺知し、かくて道に志すこととなつたのである。至言は必ず他を動かすものである、道を傳へんと欲する者は、深く

此邊の消息を考慮せねばならぬことである。

三七　赤魚の大悲

大聖世尊が給孤獨園にいましゝさる年の秋、諸種の果物が非常に能く成熟したことがあつた。それで諸比丘は、聚落を遊行するごとに、多分の果物を供養せられ、思ひのまゝに是れを食ふたが、其爲め多くの比丘は痢疾にかゝり、定時の座禪讀誦等を爲すことが出來ぬことゝなつた。

爾時、阿難尊者は世尊に向ひ、世尊は如何なる宿福によつて、何をおあがりあそばされても能く消化して、諸の患苦に罹り給ふことなく、威顏鮮やかにいますやと御尋ね申上げた。すると世尊は阿難に對して、我れは過去世の時に慈悲を修行し、湯藥を和合して多くの衆生に施したるにより、今日は其德によつて、無病の報ひを得たのであると仰せられた。阿難は重ねて、過去世の御修行とは抑も又如何なることにていましゝかと御尋ね申すと、世尊は次ぎの因縁談をあそばされた。

昔、蓮華王が天下を統治せられたことがあつたが、王の政治のよろしきを得たるが爲め、人民熾盛にして豐樂極りなく、兵戈の跡も長く絶へて、象馬牛羊は野に饒かになり、甘蔗蒲桃及び諸の果蓏の類も甘味を極めた。かゝれば人民共は、思ふ存分に是れを過食し、其爲め種々の病を引起して、各々相扶持し王の所へ來詣して醫藥を求めた。

王は此の有樣をみそなはして深く大悲心を起し給ひ、衆醫を集めて其等の人民に施藥せしめられたが、病勢は益盛んになり、到底是れを救療すると云ふことが出來難くなつた。

爾時、王は衆醫に向ひ、汝等は何故に速かに民衆の病を治せざるやと

詰責せらるゝと、衆醫は、湯藥備はらざるが爲め、是れを救濟することが出來ず、現に我等の中にも病者あるも、それすら手を下すことが出來申さぬ始末であると申上げた。

王は是れを聞かれて、深く惆恨あそばされ、具備せぬ藥種とは何物であるかと下問せらるゝと、衆醫は、赤魚の肉と血とを得て病者に與ふれば、病は乍ち本復すべきがゆへ、各所に人を使はして是れを求むるも、遂に得ること能はず、今はたゞ手を束ねて天運を俟つの外なしと申上げた。

此の奏聞は、甚だしく大王の大悲心を刺擊した。王は心中に念せらるゝようは、我れ自ら赤魚に轉生して衆生の身病を救療せんと。それで早速皇太子を始め諸大臣をお招きになつて、仰せらるゝようは、いさゝか心願あるにより、今日より我が國事を卿等に讓るべし、卿等は我が

太子を補佐して、油斷なく國家の政治を視て、能く其治績を擧ぐることをつとめ、人民を枉ぐること勿れと。

太子及諸大臣は、王の勅命を聞きて、孰れも涕泣して申すようは、臣等に何んの罪過あつて、大王はかゝる恨語を仰せらるゝやと。

王の仰せらるゝようは卿等は一つの過狀もあることなし、但此國內一切の民衆、孰れも病に犯さるも、今は是れを救ふに由なし、此故に我れ今發願して、身を殺して赤魚に轉生し、以て彼等の身病を救濟せんと決心したことである。是れに依てかく國事を以て卿等に委付したる次第であると。

太子を始め諸大臣は、王の決心をきゝて益働哭し、前んで王の足を抱きて申すようは、我等今大王の慈覆によつて、國土豐樂人民熾盛の歡びを得たるに、如何んぞ王は、我等を捨て去らんとあそばさるゝや、願くば

初志をひるがへし給はれたしと哀願した。

王は太子に向ひ、我が此度の企ては、全く國民の安寧を希望する爲めなるに、汝は何故に固く我れを遮ぎるかと仰せられ、諸大臣の種々の諫言も、一々是れを却けて用ゐ給はず、愈々王の思ひのまゝに斷行せらるゝことゝなつた。

かくて王は香花を捉つて高樓に上り、四方を拜して、大誓願を述べらるゝようは、我今此の身を捨てゝ我が王國の大河の中に生じて大赤魚となり、我れを食らふ者をして悉く其身の病を治せしめんとすと。かく大誓願を述べ終らるゝと共に、自ら樓下に投じて命終せられたるに、其願空しからずして大赤魚となられた。

國中の人民は、河中に大赤魚ありとの報をきゝ爭ふて河に赴き、其血を吸ひ其肉を食したるに、孰れも其病を治療することが出來て、限りな

き歡喜を得た。

世尊は辭を改めて仰せらるゝようは、爾時、蓮華王は我前身にして、我れは此の如く身命を捨てゝ一切衆生の病を救ひたるにより、今日かく病苦の爲めに煩はさるゝことなき身となれるなりと。

* * * * * *

身を捨てゝ他の民衆の病を救はれたりとは、何たる偉大なる御心掛けであるか、而して是れが卽ち佛の御修行の一端であるとしてみると、私共は覺へず襟を正しふして、言ひ得ぬ感慨に打たるゝことである。博愛利他の大悲の行も此に至つては、日月と其光輝を爭ふと云ふべきである。

無病の源は、他の病を救ふに在りとの金言は、實に味ひあるお辭である。與へずして授けらるゝはなく、蒔いた始めが、あつてこそ、若、芽、

も生ずるものなれ。斯く觀じ來ると、私共の日常の行爲は、孰れも其由て來れる源泉があると云ふことが知られ、何にとなく、うらはづかしく感せられてならぬことである。

病に苦しむ者は、其苦しみを人に訴へる前に、先づ我が身が何故に此の病を受けしかと觀ずることを要す、貧苦に困しむ者も亦其本源を觀ずることを要す、かくて逆觀して其源底を叩かば、必ず天を恨みず、人を咎めずして、たゞ我身の宿福の足らざることを感じ、茲に始めて癈惡修善の大勇猛心を喚起するに至るべし。

看病福田は、八福田の隨一にして、而も世尊が因位の修行中に在つて、その身を捨てゝ是れを行ひ給ひしことを思はゞ、私共は、他の病苦に惱む者に對しては、滿腔の慈愛をそゝぎて、是れに同情を表せねばならぬことである、彼の病苦の者に對して苦い顔をする者の如きは、決して佛

の教を奉ずるものと申すことは出來ないのである。他の爲めと思ふと、薄き一紙にも重さを感じ、我が爲めと思ふと、身に堪へ難き物をも擔はんとする我等は、此の小話を讀んで實に慚死せんとすることである。

三八　長者の遺言

昔、二人の子を持つて居うた長者があつて、日頃其子等に對して、高い處のものは屹度落ち、存在しておるものはいつかは盡くる時節がある。されば此の世の中に生れたものは、一度は皆死なんければならぬ。一度出會ふた限りは、たとひ親子の間がらでも、別れんければならぬ。これが天地の道理であると申し聞かせて居つた。

然るに此の長者も、無常の風のみは免がるゝことが出來ぬから、ついに病の床に打臥したるが基ひとなり、日を遂ふて重態に傾く爲め、自らも

此度は全快の見込はなきものと覺悟を決め、二人の愛兒を枕近く招き寄せて、わがなき跡は、汝等兄弟仲よく暮し、決して別居するやうなことを致してはならぬ。たとへば一條の糸にて象を繋ぐことは出來ぬも、幾筋も寄せ集めて繩としたら、幾ら大象でも是れを切ることが出來ぬ。されば汝等兄弟は、心を一にして仲よく暮さば、恰も糸繩の樣なもので、あるゆへ、深く此の道理を心に銘し、永くわが家名をおとさぬように心懸ることが肝要であると。細々と誡めて遂に此の世を去つた。

二人は父が臨終の遺言を嚴重に守つて暮した。そのうちに弟は婦を娶つた。

一日、弟の婦は其夫に物語るには、良人は誠に腐甲斐ない方である。お金は勿論、毎日々々の用途まで、みな兄さんから當てがわかれて、丸切り兄さんの世話になり、本當に居候同樣であるわ。こんなつまらぬ身

で、いつまでもおらるゝよりも、早く分家して一家をお持ちになるがよいと申したので、弟も尤もと感じ、遂に別居したき旨を兄に申し入れた。

兄は、この相談を受けて弟に對し、汝は父が臨終の遺言を忘れたのであるか、そんなことをしては、雙方の爲めにならぬと、再三注意をしたが、中々聞き入るゝ樣子が見へぬ爲め、仕方なく弟の望み通りに分家することにきめ、家産の半分を分け與へた。

かくて弟夫婦は分家を構へたが、兎角浮世の辛苦を知らぬ若夫婦の悲しさには、日々贅澤三昧に日を送り、幾月もたゝぬ中に資産を遣ひ果して仕舞ひ、遂には其日の生活も六ケ敷くなりて來たから、兄の家へ無心に出掛けると、兄も不便に思ふて十萬金を惠んだ。

然るにこの金も亦暫しの間に費ひ果して、再び兄に無心を云ふた。

こんなことが一度ならず、二度ならず、六返までも重なつたが、其都度兄

は十萬金づゝ惠んだ。

七回目に復候難題を申し込んだから、兄は此時ひどく異見を加へて、汝、父の遺言をも打忘れ、勝手に別家をなし、おまけに暮し向きさへ都合よくやれず、その都度十萬金を與へたるに、今復來たとは何たる處存であるか、耻を知らぬにも程がある、此度は一厘も與ふることはならぬと嚴しく責めた。

弟は兄の譴責を受け、面目次第もなきことゝ、其後一生懸命に働いたが、段々幸運に向ふて遂に元の財産に立返りた。

有爲轉變の大道理は、到る處にめぐりゆき、其後兄の方は貧窮の淵に沈みしかば、此度は弟に助けを乞ふた。

然るに弟は兄に對して、兄貴は金持であつたのに、何故に貧乏したのであるか、嘗て自分が兄貴に頼んだ時は、ひどく譴責して一厘も與れなんだことは、よもや忘れておらぬであらふが然るに今日はどんな心で來られたのであるかと、暴言を吐いた。

兄はこの言葉を聞きて、兄弟であつても此の如きものであるとすれば、他人は尚更のことであらうと存じ、ほと〳〵人世の頼み甲斐なきことを證り、直ちに出家して家に歸らず、そのまゝ山に入つて佛道を修行し、やがて辟支佛の證を開いたとのことである。

* * * * * * *

全体の統一が偉大なる勢力を生ずることは、何事にでも行はれてゐる原則であつて、宇宙の事物はそれをしなければならぬ約束を有しておるものである。見よ、私共の一身上にても、五官が勝手氣儘の振舞ひを致したならば、私共の勢力は、乍ちゼロとなるべし、殊に人格上の性行に於て最も甚しきものを認むるのである。

束ねたる糸の能く大象を繋ぐが如く私共は信仰の威神力によつて日常の働作を約束せられて始めて眞正の人生の本分を盡すことが出來るのである。

三九　慳貪の應報

大聖世尊、嘗て王舍城の迦蘭陀竹林に在しゝ時、舍利弗と目連の兩人は、食時毎に三途の苦惱を觀察し、一切衆生をして生死を厭離して涅槃の安樂を求めしめんとした。

それで目連尊者は、いつもの如く餓鬼道を觀察しておると、一餓鬼の身は燋柱の如く腹は大山の如く、咽は細針の如く、髮は錐刀の如くにて其身を刺し、諸支節間よりは悉く火を出し、呻吟大喚して四方に走り、屎尿を求めて飲食をなし、而かも終日勞苦するも容易に是れを得ることが出來ずして疲れ苦しんでおるを見受けた。

爾時、目連は前んで其餓鬼に近寄つて、汝は何んの業報にて、如此き苦しみを受け居るやと尋ぬると。餓鬼は答へて、日の輝くおりには、燈燭は入らぬ。如來世尊今現に在すゆへ、汝自ら問ふ可し、我れ今飢渴して答ふる能はずと申した。

目連尊者は、餓鬼の辭を尤と思ひ、直ちに世尊の許に赴きて、此事を尋ねんとした。其時世尊は大衆の中に在つて、諸天人の爲めに妙法を說いておられたが、目連が入來を認められて、汝は今何か變つた事を見たかとお尋ねなされた。

目連は答へて、只今一餓鬼の身體燋然たるものが、東西に驅走して食を求め、非常に勞苦しておつたのを見受けたと申し、且つ世尊に向ひ、何等の惡業を造つて、かゝる苦しみを受くるや願くば廣說せられたしと

お尋ね申した。すると世尊は、目連に對し、汝諦かに聞くべし、我れ今汝の爲めに分別解説せんとて、次ぎの物語りをあそばされた。

昔、舍衞城中に一長者があつて、甘蔗の汁を作ることを渡世としておつた。時に或る辟支佛があつて、病に罹つたが、甘蔗の汁を服すると、本腹が出來るとのことを聞き、早速長者の家に赴いて、其供養を乞はるゝと、長者は辟支佛の庠序威儀の正しきことを一見し、深く渴仰の心を起し、辟支佛に向ひ、求めらるゝものを尋ぬると、辟支佛は、我れ今渴病にかゝりて苦しめるにより甘蔗汁を供養せられたしと、申し出でられた。

長者は、それはいと易いことなりとて、直ちに内に入つて、其婦の富那奇に向ひ、自分は急用あつて外出せねばならぬから、お前は自分に代つて甘蔗汁を供養せよと申し付くると、婦人は、仰せ通りに致しますゆへ、貴方はお攜ひなく外出あそばさるべしと申した。かくて夫が外出し

たる後、婦人は出て辟支佛の鉢を請ひ、窃かに鉢の底に不淨物を入れ、その上に甘蔗の汁を盛つて差し上げた。

辟支佛は、供養の鉢を受け取ると、甘蔗の汁は入れてはあるが、而も何等か不淨物が混じてあると云ふことに氣付き、直ちに地に投棄して空鉢の儘にて立ち去つて了はれた。

然るにその婦人は、慳貪の報ひを受けて、死後餓鬼中に墮し、常に飢渴の爲めに苦しめらるゝことゝなつたが、今の餓鬼こそは彼の婦人の後身なりと仰せられたとのことである。

* * * * * * *

人間の境遇程不思議なものはない、等しく耳目手足を具有して世に出でながら貧富、貴賤、賢愚と、一人々々其果報が異つて、廣い世界に全く同一の德分を持つておる者は一人もない。抑もかゝる相違は何によ

つて來るのであろうか。世尊は是を說明して大經に曰く「强きものは弱きを伏し轉たあひ剋賊し殘害殺戮して迭にあひ呑噬す善を修することを知らず惡逆無道にして後に殃罰を受く自然に趣向して神明記識して犯すものは赦さず。かるがゆへに貧窮下賤乞匄孤獨聾盲瘖瘂痴弊惡のものあり、狂不遇の類あるに至る、また尊貴豪富高才明達なるあり、みな宿世に慈孝にして善を修し德を積むの致す所に由りてなり」と申されておる。卽ち前上の相違は、全く是れ己れが前生に於ける種因に基くものである。私共は如何なる場合に在つても、此原則の範圍を脫することは出來ぬのである。

人を苦しむ者は、やがては人に苦しめられねばならぬ者である。人を樂ましむる者は、いつかは人より樂めらるゝ者である。爾に出でたる者は、遂に爾に歸來し、其間毫末の誤りを許さぬ。尊者目連の目に留

まつたる餓鬼は、全く其身の錆にて苦勞しておるのであつて、誰を咎むることも出來ぬのである。是れを思ふと、私共は念々に反省して修善の大道を步まねばならぬことである。

身から出た錆は、人の知つたことではない。人生一代の百般の行爲は、就れも皆、身から出た錆である。されば私共は、私共の苦樂浮沈に就ては、斷じて他を怨恨してはならぬ。何等の事に際會するも、須くその錆の出所を吟味して、獨靜にその善後策を講ぜねばならぬことである。

四〇　餓虎の救助

昔、世尊が祇樹給孤獨園に在ましゝ時、一日阿難をつれて王舍城中へ分衞にお出ましなされたことがあつた。

時に、城內に二人の息子を持つてをる老婆があつたが、それが揃ひも

揃ふて根性が曲がつておつて、到る所で強盜を働くと云ふ始末におへぬ惡徒であつた。爾し如何に惡運が強くも、それがいつまでもつゞくはづなく、遂に天網に罹つて警吏の爲めに捕へられ、種々と糺問の末、國の法律に照らされて死罪の宣告を受け、今や將に斷頭臺の露となるべき爲めに、引き立てられて行く處であつた。此罪人なる母子三人は、遙かに世尊のお姿を認め、彼方に向ふて、伏し拜み、われ願くば天尊我等の苦難を救ひ、我等の危き命を助け給へと祈願した。

世尊は此有樣を打觀め給ふて深く哀れと思召し、早速阿難を國王の許に遣はして、彼等の爲めに命請をなされしに、王は世尊の辭を聞き入れて即座に是れを放免せられた。

三人は夢かとばかり打ち驚き、しみ〴〵佛恩の廣大なるを感じ、直ちに祇園精舍に詣ふで、世尊の御前に跪きて合掌して申上るようは、

願くば天尊慈愍を垂れ、吾等を御弟子の末に加はらせ給へ、

と申上げたるに、世尊は是れを許し給ひて善來比丘と仰せらるゝと髮自然に落ち、被服は乍ち如法の袈裟と變じた。こゝに三人の者は今更ながら敬慕の思ひを增し、一倍に信心堅固となつた。それで世尊は、二人の爲めに說法せられしに、立所に諸々の煩惱を離れて阿羅漢道を證つた。此說法を拜聽したる老婆も亦阿那含果を得た。

爾時、阿難はまのあたり此吉慶事を見奉りて、未曾有の事と讃嘆し、世尊に對して、今此母子三人が世尊に値ひ奉りて重罪を許され、且つ一座の說法に於て涅槃を證得したることは、實に快よきことなるが、是れは抑も何等の因緣によりたるものなるかと、お尋ね申したるに、世尊は阿難の爲めに次ぎの因緣談を物語られた。

昔摩訶羅檀那と云ふ大國王があつたが、王には、摩訶富那密、摩訶提婆、

摩訶薩埵と云ふ三王子があつた。中にも少王子摩訶薩埵は、殊の外慈悲深き性質の方であつた。或日、大王は王妃を始め三王子及び群臣等を引き具し、野遊びに出られた。行樂の間に王は稍々疲れをもようされ、暫く休息すべき由を仰せ出された。其間に三王子は父王の許を離れて林間をあちらこちらと遊行してをられたが、ばからずも、とある木影に一大乳虎が二兒に乳を與へておるのを見出された。所がその乳虎は飢餓の爲めに痩せ衰へて、苦しさの餘り、おのが愛兒等を今にも喰ひ殺さんとしておる風に見受けらる。

此憐れなる有樣を觀められたる少王子は、二兒に向ふて、

彼の虎は、見かける所、痩せ衰へて頻死の苦しみにある樣子なるに、乳離れせぬ其子等は、乳房を求めて止まぬゆへ、苦しさの餘り、それを喰ひ殺さんとしかけておるのではありますまいか。

と尋ねらるゝと、二兒は、

どうも左樣らしいよ、

と答へられた。すると少王子は、

何を食はしたら、助すかりましよう、

かと云はるゝと、二兒は、

それは殺し立ての血潮のしたゝる肉を與ればよいのであるが、

と申された。少王子は重ねて、

誰れかそうしてやつて彼等を救ふて與る者はありますまいか、

と申された。二兒は、

それはなか〳〵容易なことではないよ、

と答へられた。爾時少王子は心の中に倩ら思はるゝようは、我れは久遠劫よりこのかた、無量の生死中に我身命を捨てたること幾干なること

とを知らず、而も孰れもみな、貪瞋痴の爲めであつて、未だ一度も大法の爲めに是れを捨てたることなし。然るに今幸に是れを行ずべき好機會に際會す、されば大慈悲の行ひの爲めに、此肉身をさゝげんと、深く決心の臍を固められたが、而も此覺悟をば二兄に悟られまいとて、暫く二兄の後につゞき道を歩まれたが、未だ遠くも行かぬうちに、二兄に向ふて、

兄上達は一足先きに行かれたし、我れは一寸と用事を濟して、直ちに後より逐付き申さん、

と申して、もときし路へ引き還へし、やがて餓虎の近くに來りて、身を踊らしてその前に臥せられた。然るに虎はどうした譯か、口を噤みて敢て是れを噉まんとせなんだ。爾時王子は、是れは餘りに餓へたるが爲めに、噉付くべき元氣もないのであろうと思はれ、自ら木刀を取つて身

を刺し血潮をしぼり出されたるに、餓へたる虎は、其血を舐めて、やつと元氣づいたと見へ、飛びかゝつて王子の身を八つ裂きにした。

先程より來るか〳〵と待つて居られた二兄は、少王子の來られぬことが氣がゝりとなり出した、それに先程の話のことも思ひ出され、或は萬一のことでも仕出しはしまいかと心配せられて、取つてかへして、此處彼處を尋ねらるゝと、案の條摩訶薩埵は、乳虎の餌食となり、其邊りは生血が塗付けられてあつた。此有樣を觀められたる二兄は、あつとばかりに打ち驚き、大地に打ち伏して氣絶せられたが、やがて息吹き返へして正氣となられたと思ふと、又泣き叫びで狂亂の態となられた。

休息中の王妃は、適〻假睡せられたが、夢に三羽の鳩が林間に遊んで居ると、一羽の鷹が飛び來つて、其中の小さき一羽を捉つて食ふて了ふたことを見られた。それで醒められた後に、其由を國王に物語られて、

諺にも鳩は我子の形見であると云ふこともあれば若しや末子の上に不幸でもあるのではあるまいかと申さるゝと、王も或は然らんかとも思はれ、直ちに人を遣はして王子方を尋ねしめられた。

彼れ是れするうちに、二王子が還られた。王と王妃は、摩訶薩埵はどうしたかと尋ねらるゝと、王子方は、何んと答へん樣もなく、胸は塞がり、口は閉ぢ、話も出來ぬ樣であつたが、やつとのことに氣を取り直し、有りし次第を逐一に話された。王と王妃は是れを聞るゝと共に、胸も張り裂けんばかりに痛嘆せられたが、かくては果てじと、二王子と采女等を引きつれて、死屍のある方に馳せ向はれた。その時は虎は思ふ存分に喰ひ暴らし、たゞその殘骨のみが此處彼處に散らばつておつた。父の大王は、死屍の頭を採り、母の王妃はその手に取りつき、我れを忘れて泣き崩れられた。

さて摩訶薩埵は、命終の後兜率天に生れ、自ら思はるゝには、我れは如何なる行ひをなして、此果報を受けたるかと、天眼を以て遍く五趣を見渡さるゝに、山間にある我前身の屍に、父母の取付きて泣き悲んでおるのを見出された。太子は此樣を觀められ、かゝる悲哀の極に陷らるゝ時は、その身をそこなはるゝの恐れあれば、これを敎諭して慰め奉らねばなるまいと思はれ、早速空中に降つて、種々の說法を致された。王と王妃は是れを聞かれて、

汝は何んの神なるか、

と尋ねらるゝと、天神は是れに答へて

我れは王子摩訶薩埵なり、我れは一命を捨てゝ乳虎を救ひたるが爲め、今は兜率天に生れたのである、

と告げられ、尙ほ辭をつぎて、

大王よ、大凡そ物は皆無に歸す、生あれば滅あり、惡を爲さば地獄に落ち、善を爲さば天上に生るとの理を知り給はざるか、思ふに生死の道は、何人も免ることを能はざるものなり、大王願くば煩惱の海に沒して憂に苦しむよりはやく衆善を積みて苦界を離れ、生天の妙果を望み給ふべし、

と申された。國王は是れに對して、

汝は大慈を行じて、一切の者を愛憐すと云ふにも拘はらず、何んぞ我等を捨てゝ滅度を取りしや、我が汝を思ふ程の心も知らざるかと愚痴をこぼされた。

此時天神は種々の妙偈を說きて說法せられたれば、國王も王妃も大に感悟せられ、殘骨を集めて七寶の寶函に納めて是れを葬り、其上に塔を建てられた、此に於て天神は何處ともなく消へ失せ、王及大臣等も宮

中へ還へられた。

此物語をなされたる後、世尊は阿難に對し、その時の大王摩訶檀那は、今我父なる閻頭檀那寧にして、王妃は、我母摩訶摩耶なり、而して摩訶富那密は彌勒にして、摩訶提婆は婆羅密多羅、小王子なる摩訶薩埵は是れ我前身なり、又その乳虎は今の老婆にして、その二子は虎兒の後身である。我れは久遠の昔に在つても、彼等の危急を救ふたるが爲め、今又彼等を助けて、永く生死の大患を離れしめたのである、と申述べられた。

* * * * * * *

永劫因位の修行の何物たるかは、此一話によつて遺憾なく闡明せられておるのである、檀婆羅密の行爲は、かゝる大施を行ずる底の決心がなくては、斷じて其美果を收むることは出來ないのである、世の佛弟子と稱する者は、世尊の此行爲に鑑みて深く反省しなければならぬこと

である。

思ふに佛の教は、その聖道門と淨土門たるに論なく、常にこの大施の本意を忘却してはならぬことであつて、我聖人は、金剛心の中には、常行大悲の德ありと斷言せられておることである。然るに他力一門の人々の中には、時に或は如來の大悲にないて、信後の行爲を徒閑に附し、念佛の中に隱れて已れが非行を顧みざるの徒らものの存することを認ることであるが、是等の人々は決して眞實の遺弟とは、申すことは出來ないのである。

我れに六度の大行を勤めよの注意はなく、我れに捨身の大悲を爲すべしとの勅命はなきも、而も三毒の煩惱は如來の厭惡し給ふ所のものなれば、責めては是等の煩惱を厭ふ所の精神を惹起せねばならぬことである。

善導大師曰く、佛の捨てしめ給ふものは、即ち捨て、佛の行せしめ給ふものは、即ち行じ、佛の去らしめ給ふ所をば、即ち去る、是れを佛教に隨順し、佛意に隨順すと名づく、是れを佛弟子と名くと。經釋の明文炳として日星の如し、閑却すべからざるなり、希くば是等の教訓を奉戴して、我向上の道程の標準とせねばならぬことである。

藏經新釋 **因緣聖話** 完

明治四十一年十二月廿五日印刷
同　年十二月三十日發行

○因緣聖話奥附（
○金參拾五錢（

著作者　河崎顯了
同　長等神立
京都市油小路御前通上ル

發行者　清水精一郎
京都市木津屋橋通堀川東入

印刷者　井出時秀
京都市木津屋橋通堀川東入

印刷所　株式會社六條活版製造所

不許複製

發行所　京都市油小路御前通上ル　興教書院
（振替口座四壹壹壹番）

○閑藏叢書第二篇 **因緣聖話** 新版 定價金參拾五錢 郵稅四錢

○閑藏叢書第三篇 **續譬喻聖話** 近刊

○**新釋百喩經** 第二版 定價金拾六錢 郵稅貳錢

○**續家庭說教** 新版 定價金參拾錢 郵稅不要

○精神修養 **一日一談** 近刊

◎河崎顯了先生著書報告

○閑藏叢書第一篇 **譬喩聖話** 第二版 定價參拾五錢 郵稅六錢

○**致海一瀾評**　本書は題號の如く大藏經中より種々の譬喩を拔き出して之を和譯したるものにして著者輕妙の筆致最も之に適し有益にして興味盡るなき近來の好著也執つて以て自己の修養に資せんも亦以て化他布敎の資料に供せんも何れもなかゝに得難き寸珍のみ聖話載する所鳩鹿問答より始まり老爺の涙に至る五十題にして悉く是れ佛陀金口の道話に外ならず讀み去り讀み來りて無限の敎誨あり凡そ道を說くは平易なることを要す而も亦卑俗なるべからず此書の如き平易にして高尙堂々たる學者も誦すべく文盲の子女も亦讀むべきは最も傳道上に喜ぶべきもの也予輩は廣く江湖に紹介することを憚らざるもの也

○**大阪新報評**　大藏八萬の經中に在つて一面の異彩を放てる譬喩說法を譯せる

もの原文已に幽玄深遠の哲理を說明するに簡潔なる平談俗語を以てし趣味津々として盡きざるは知る人ぞ知らん而して世未だ多く其甘味に指を染むる能はざるを惜み著者得意の筆を以て之を譯し且附するに親切なる註解を以てし寸鐵人を殺す底の痛快なる論鋒と諄々蒙を啓く講說と相俟つて甚深幽玄なる至哲三昧に悟入せしむるに足るものあり讀誦數次蓋し佛敎經典の趣旨をバイブルの形式に依つて開くの感あるべく難澁至難の佛說の茲に平民的に譯せられたるは最も喜ぶべし

○中外日報評　本紙上に連載せし河崎顯了學師の譬喩聖話を訂正删補して出版せられしものにして藏經中の譬喩說法五十種を平易簡潔に叙釋し且各聖話の終りに著者の心眼に映じたる感想を附記せり凡そ藏經の聖喩は世俗卑近の說話の中に高尙なる哲理を寫し而も之れを行るに寸鐵殺人的の痛快なる論鋒を以てし不知不識の中に道味を愛樂せしむるものなれば煩瑣なる理窟己上に安心立命の道を求めんと欲するものは宜しく本書を介して世尊の說法をさかば得る處少なからざるべし

○萬朝報評　大藏經中にありて最も興味ある譬喩の小話鳩鹿問答智慧賈等五十種は比較的平易なる通俗文に譯出して更に著者自身の胸臆映じたる所感を加味したるもの也手輕に大藏經中の譬喩を見得らるゝは嬉ばし

○白百合評　佛典中にある喩言は假に信仰と云ふ事を除いても尙ほ讀んで樂みともなり思想を養ふ方便ともなるべし其譬喩にはまゝ放縱に流んとする傾きのある者あれど其實は整正にして能くユニチーを保てりかの滾々として盡きざる話中に處々此の異彩ある譬喩を插入して深遠なる哲理を縱橫に論破し聽者に眞理の狀態を認識せしむる妙は佛典以外には之れなかるべし本書は河崎顯了氏が佛說舊城經佛說箭喩經等の數十の佛典中より會心の妙話を抄出してなだらかに譯し且其眞意を發揮する爲め一話毎に更に見解を附記せるもの鳩鹿問答智慧賈子供の智慧等を始め五十篇とし皆深甚なる趣味と貴重なる思想を含めり吾人は此の妙著を歡迎し且續篇續々篇の刊行を望む

○精神界評　本書は著者が多年の研究とまた親切とより出來たるものである即ち著者が藏經中に出たる譬喩及說話を和譯し集められたものにして誠に趣味多く家庭

の讀物としては赤松君の修養小話と同じく最も好個のものである藏むる處の鳩鹿問答智慧賣等五十の譬喩と說話は何れも大藏中殊に異彩を放つて居るものにしてまた其終りに著者の所感を附記せられたるはどこまでも親切なる書物である著者は次篇續篇をも編次して藏中の譬喩を網羅せんとの企圖ありとどうか彼の印度の說話の大成として有名なる「說話の洋」のやうなものが著者によりて出來るやうに念じます

○大阪朝日新聞評　近年佛敎を味ふもの難澁なる敎理の研究より寧ろ釋尊の金言を味ふて之を實行せんとする風を生じ隨つて一大藏經中に於ける人生の修養に關する部分の譯出せらるゝもの多し本書は藏經中の譬喩を以て經とせるものより五十個の譬喩を選んで之を和譯し且つ一々其末に說明を附したるもの也蓋し是等の譬喩は皆な日常吾人の行爲に關するもの多ければ修養者の好伴侶とならん

○中央公論評　大藏經典稱して八萬卷と云ふ人は其餘りに江漢なるに喫驚して專門の學者に非ざれば得て覗ひ知る能はざるものとしそれを俗談平話にて是等經典中より最も會心の小話を抄出して出版したのである輕快流暢なる筆致は遺憾なく原書の眞髓を傳へて興味津々の裡婦女子と雖も能く佛敎の一大哲理を會得了解するに難からぬ程巧みに描寫せられてゐる

○警世新報評　佛陀の經典が奇警なる譬喩に富み其面白きものは昔より西歐を初め東邦諸國に傳はつて種々の童話となりおることは今之を讀するの要なし。此書は河崎師が聖務の餘暇を以て大藏經中より偶其の巧みなる譬喩五十を拔萃し一々之れに氏の評釋を加へて偶其の在る處を發揮して修養の一助となせるもの也宗敎家敎育家の好き參考書となるべし

○家庭說敎　第二版　定價參拾錢　郵稅不要

○中外日報評　近來京都の敎界に嶄然頭角を表したる河崎顯了氏が多年自ら各商家等の招聘の席に試み來られし法話を蒐めて冊子としたるもの全篇十二章に分ち主として人生と宗敎の關係を基として縱說橫談されたるものにして悉く實驗の聲也之を聽く者泣く可く笑ふ可く慚愧すべく大悟すべし附錄として無宗敎者の爲めにパクラム

物語を添へたるは注意の周密なることを見るべく卷首に氏の嚴父藤岡了空師が輕妙の筆にて一家族の笑ひ樂める狀を畫きて「家内中親子揃へて大笑ひ是天然の音樂の聲」と題したるを掲げたり肺病十年の蟄々翁が愛兒の新著に接して嬉さに耐へかね一氣呵成に讀了したりと云はる斯る妙趣あり興致ある書冊を嬉しく讀む者豈獨り愛兒に對する慈父の情のみならんや

○六條學報評　こは著者の自序に云ふ如く諸所の家族の需めに應じて試みたる宗教談にて特に宗教が處生と家庭との上に必要なる所以を談じたるを蒐集したるものなれば先づ人生と宗教の關係よりして他力眞宗奥義を叙し家族各自の心得を述べ全篇十二章丁寧親切讀む者精神修養の資とすべく殊に布教傳導の人士も亦一讀すべきものならんか

○精神界評　大きな文字で分りやすく懇ろに趣味多く信仰上の問題を說き明して下さつてありますかやうな結構な本を出して下さつたことはありがたい次第であります私は世の中の家庭に之をすゝめます

325
10

安徽中医学院
图书馆藏

326
10

325
10
Ⓜ

014739-000-9

325-10

因縁聖話

河崎　顕了

長等　神立／著

M41

ABC-0028